

「樹

木医をやっていると面白いですよ。世相が見えてきます」と語るのは樹木医になつて三年目の森岡千恵さんです。森岡さんは、日本工営株式会社で、建設事業などで影響を受ける樹木の調査や、緑化地の計画・設計などを行ない、日本樹木医学会の広報部会員として会誌やニュースの編集に携わっています。

森岡さんによると「春から初秋にかけては樹が活発に光合成を行い、枝を伸ばして幹を太らせ、力をつける時期です。だから、森林では間伐や枝打ちは樹の成長が一休みする秋から冬にかけて行いますよね。しかし、街路樹の管理を見ていると、夏から初秋のまだ栄養を蓄える時期に刈り込みや枝落しがなされています。樹にとっては非常にかわいそうな光景ですが、これは、プラタナスやシダレヤナギなど成長の早い木では台風備えて折れやすい枝を事前に除去する必要がある一方で、イチヨウやケヤキなどの落葉によるクレームの増加を自治体が懸念して事前に刈り込みをし、落葉前に枝ごと回収していったためです。街路樹では、通常枝は下から落とすのですが、上のほうだけ伐つてちようだい——といった要望が出ることもあります。理由を聞いてみると、日が当たらないからという答が返ってきます。緑に対する関心は非常に高まってきており、特に都市部の住民にはその傾向が強く表れています。これは『頭の中の緑で、手で触れている緑ではない』と思います。植樹祭というところの人が多いですが、落葉は嫌い——といったように自分勝手な緑のイメージを持たれているのが実感です。周りを舗装で固められ、非

緑のエッセー

樹木医 森岡 千恵

もりおか ちえ
埼玉県生まれ。明治大学農学部農学科農業土木・緑地学専修卒業。日本工営株式会社社会システム事業部環境部環境緑化グループ所属。技術士（建設部門・森林部門）



常に厳しい環境を強いられている街路樹だけに、枯葉や落葉も肥やしにしたりする日々の管理に周りの方々も参加して頂けるといいのになというのが本音です。樹の代弁者である樹木医としては、『頭の中の緑』はなんとも歯がゆい問題で、まだ解決策は見い出せていません」と顔色が曇りました。

その森岡さんは「樹木を守るのは地域の人達です。樹木医がいくら頑張っても守りきれません。樹の大切さに気付くのをお手伝いするのが樹木医の務めだと思います」と語る表情には生き生きさが垣間見えました。

「日本人は桜が大好きです。どんなに枯れかけていても、住民の方々からは『伐らないで欲しい』という要望が出てきます。しかしながら、住民やそこを通る人の安全を守ることも樹木医の大切な責務です。樹を傷つけないで樹木内の状況を見ることができる画像診断器などを活用して、幹や根元のうろ（空洞）を調べ、危険性がある場合は、住民に理解して頂いた上で取り除いたり、新たに植樹を行うなどで再び樹を育ててもらうようになります。樹木医という衰退した樹を見る場合がどうしても多くなりますが、樹を地域の財産として次世代に繋げてゆくことは、非常に楽しみな機会といえます。樹木医は、樹の見た目ばかりでなく、土壌や根、虫、きのこなど診断すべき項目は多岐にわたり、広範囲な守備力を発揮しなければなりません。人間で言うたら外科と内科と放射線科などを全部含めたようなもの。やりがいはあります」と言葉を結びました。